

Guidelines International Network (G-I-N) Conference 2012 第9回 国際会議に参加して

EBM医療情報部 部長
吉田 雅博

「第9回Guidelines International Network (G-I-N) Conference」が、8月21日から25日まで、ドイツ、ベルリンにて開催されました。本会議は、EBMおよび診療ガイドラインの作成・普及・活用に関する活動を行うG-I-Nが主催する国際会議で、毎年8月頃にアメリカ、ヨーロッパ、アジアのいずれかの地で開催されます。今年の主題は“Global Evidence – International Diversity”、44カ国から約500名が参加し、発表数は300を超えました。

本会議の前日には、主にガイドライン作成方法やガイドラインにおける医療経済に関する講習会が開催され、続く本会議では、5つの主題（①10 years of G-I-N: Lessons learned and future vision. ②One guideline methodology for all? ③Do guidelines make a difference? ④Patient involvement in guideline development. ⑤Knowledge Translation 2020.）に関する教育講演を中心に、ワークショップ11演題、パネルセッション9演題、口演80演題のほか、200近いポスター発表が併行し、活発な討議、意見交換が行われました。

ガイドライン作成方法については、エビデンスの評価や推奨作成のための基準を示すGRADEシステムとその更新情報、COI (conflict of interest) に関する留意事項と関連情報が提供されました。

ガイドラインの臨床への効用については、患者関連のアウトカムに関する研究報告が少ないことへの問題提起があり、医療現場での活用を念頭においたガイドライン作成の必要性が提唱され、ガイドラインの推奨からQuality Indicators (QI) の開発を行った論文とQIが備えるべき特性が紹介されました。

ガイドラインにおける患者参加については、医療者が想定する患者の好み・価値観と実際との乖離状況、患者のゴールや環境に合わせて推奨を適用することの重要性について説明され、ガイドラインを医療者のみで作成することの危険性が指摘された後、“ガイドラインは誰のためのものか？”という問いが投げかけられたのが印象的でした。

G-I-Nの今後の展望として、Cochrane Collaboration、AGREE Enterprise、ISQua、GRADE working group等の国際組織との連携強化が掲げられ、質の高いガイドラインの開発と社会での活用に向けた取り組みを支援するG-I-Nのミッションが再確認されました。来年8月には、第10回国際会議が、アメリカ、サンフランシスコで開催されます。

Mindsは、今後もよりよい医療の実現に向け、国際動向の把握と情報交換に努めてまいります。



左から吉田、山口特命理事、奥村主任